

異次元の余裕(ルカ 6:27-38)

私たちが生きるのにいちばん大変なことの 하나가、多分人間関係ではないかと思ひます。それで世の中では人間関係についていろいろな方針を示して、また教へています。そして、信者の私たちも同じ水準でその方針に従って人間関係を頑張ろうとしています。しかし、聖書にはそのような世の中が示してる方針とは次元が全く違う対応を求めて、また示しています。それは単なる道德の器云々する話とはまったく違う内容です。今日の聖書がそういう意味で書かれていゝるという目で見ないといけません。特に 32 節から 34 節まで見ますと、「罪人たちでさえ自分を愛する者を愛しています」といゝうような内容が書かれていて、私たちクリスチャンの人間関係に対する態度、対応、姿勢が世の中の人々と次元が全く違うものだといゝことを教へ示しています。それで正直に今日の聖書の箇所を見ますと、これはできるか、なんでここまで言われているのか、と思ひかもしれません。あなたを呪う者を祝福しなさい。あなたの敵を愛しなさい。そのような人間関係が果たして可能なのでしょうか。私たちはそのような人間関係の姿勢で今生きているのでしょうか。なぜここまで言われているのでしょうか。どのようにすればこのような姿勢を持つことができるのでしょうか。

1. 信者には、真理を知る人の余裕が現れる。

まず第一に、信者には真理を知る人の余裕が現れるので、このような人間関係が可能になるわけです。

真理といゝるのは一体どういゝう内容なのでしょう。何かの事実そのものが真理ではありません。

1) 神様を離れた人間の解決不可能な霊的問題 ヨハネ 8:44、エペソ 2:1-3

真理といゝるのは、神様を離れた人間に解決不可能な霊的問題があるといゝことが真理です。それで聖書のヨハネ 8:44「あなたがたは、悪魔である父から出た者であつて」と言われています。神様を離れた人間は、身分そのものが悪魔の子になつてしまひ、解決不可能な運命に囚われている存在です。それでエペソ 2:1-3 には、自分の罪過と罪との中にあつて死んでいゝた者であつて、そのたましいが死んでしまひ、自分がこゝしたい、あゝしたいといゝうことと全く関係なく悪魔サタンに従うしかない人生を生ゝることになり、生まれながら神の御怒りを受けるしかない子らとして生まれて、神の御怒りを抱えて生ゝているので、真の平安と安らぎなどは最初から見あたらないし、味わうことはできないそのような霊的問題を抱えているといゝうことが真理なのです。

2) 神様のただ一つの願ひ、救ひ ヨハネ 3:16、ローマ 5:8

人間のこのような解決不可能な問題が本当に何か分かつて認めるよゝうになれば、人間に対する神様の願ひはたった一つしかないといゝうことに気づくよゝうになります。神様は人間に対してあらゆることを願ひ、いゝろんな指示をなさる方ではなくて、神の人に対しての願ひは一つしかありません。それは解決不可能な霊的問題、滅びの運命に囚われて、自分ではどうにもならないその人間のことを愛して、そこから救われることだけが神様の願ひになります。これが真理です。聖書には、神は実にひとり子をお与えになつたほどに世を愛された。それは御子を信じる者が誰一人として滅びることなく永遠のいのちを持つためであると。このよゝうに神様の願ひ、特に罪人の人間に対する願ひがどういゝうものなのかを明確に示しています。ローマ 5:8 にもこのよゝうに書かれています。「しかし、私たちがまだ罪人であつたとき、キリストが私たちのために死なれたことによつて、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。しかし、私たちがまだ出愛をキリストが私たちのために死んでくださったことによゝり、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられる。神様の願ひは罪人の私たちがサタンの奴隷となり、地獄に行くしかない運いのちを抱えて生まれながら神の御怒りを受けるしかない全くやすらぎとは縁のない、いゝういゝう不幸な人生を送っている私たちがそこから解放されて救われること以外に何も願ひておられません。これが真理です。しかし、信者でさえ、教会でさえ、なぜ真理をこのよゝうに理解してないのでしょうか。まるで神様が私たち人間に対してあらゆる要求を持ていらっしやるかのよゝうに教会でも教へていゝるのではないでしょ

うか。それは真理ではありません。真理は神の人に対する願いは救いただ一つだけなんだ。これが真理です。

3) キリストによる救いの完成-ヨハネ 19:30

そして、神様はこの神の願い、人の救いを御子キリストによって完全に成し遂げられ救いを完成なさいました。ヨハネ 19:30、十字架の上でイエス・キリストが宣言されました。すべてを完了したと。これが真理です。人が救われる、その神の願いが願いに終わるのではなくて、未来をイエス・キリストを通して十字架で死なれることすべて完了なさいました。これが真理です。

4) 人の唯一絶対必要 神様の無条件の愛と救い、祝福-キリスト

なので真理が何か分かったということは、人の唯一、また絶対必要が何なのか、それに気付いたということになります。信者がこの真理について気付いて、真理が何か本当に正しく分かったとすれば、人間に必要なことはただ一つ、また絶対的に必要な神の無条件の愛、これが人間に必要なだということが分かるようになります。これが真理なのです。神様の無条件の愛により無条件の救い、これこそが真理なのです。神様の無条件の祝福、無条件の他には、私たちに希望などは全くありません。これが人間に必要なものであり、また唯一、絶対必要なもののなのです。もう一度言います。神様の無条件の愛と救い、神様の無条件の祝福が人間には求められ、また必要なものになります。そして、それこそがキリストなのです。キリストによって神様の無条件の愛が私たちに届き、神様の無条件の救いが成し遂げられ、神様の無条件の祝福が私たちのものになるということが約束されて、またその通りになりました。イエス・キリストが十字架でこのような人間に必要な救いのすべてを完了なさいました。これが神様の願いであり、また真理というものなのです。信者というのは、この真理が何か分かる人なのです。

5) 他の何かで神様の願いと人の必要を忘れないこと

この真理が分かっているのも、他の何かでこの神の願いと人に必要なことを忘れることにはないようにと、これが人間関係になります。それが実は真理が何か分かっている人から生まれる余裕なのです。あなたの敵を愛しなさいと言われていて、それがただ人間的な理屈や感情によって可能なのでしょうか。しかし、神の願いはその敵が救われることであり、その敵にキリストが伝えられることであり、それが真理なのです。それが分かっているものが信者なので、敵のどうのこうのによってその真理を忘れない、神の願いを忘れない、その敵に必要なこと、救いの祝福を忘れることにはないということなのでその敵を愛することになり、呪う者のために祝福を祈ることになるということなのです。普通の今までの考え方や生き方、また理屈、法則などでは到底理解できないでしょう。信者でさえ信者の人間関係に対しての対応がどんなものなのかに対して全く分かっていない人が多くいらっしゃいます。それがなぜかと言いますと、その人の修業が足りないからでもなく、道徳的な器がまだ整っていないからでもありません。信者にしか分からない真理にまだ目覚めていないからです。聖書をたくさん読んでいても真理が何が分かかっていないと教会に20年、30年通っていろいろな奉仕をしたとしても、真理が分かかっていないと正しい人間関係は不可能になります。だから世の中の水準と同じ水準で世の方針にしたがって人間関係をどうにかしようと頑張るしかありません。しかし、それでは正しい人間関係、本当に人を生かす神様が願う人間関係には届かないのです。神様がクリスチャンに求められる人間関係というのは真理が何か分かったがゆえに、何がどうであれ、その真理に立って神の願いを忘れないこと。相手がどんな相手であれ、その相手に必要なキリスト、無条件の救い、神の無条件の愛、それを忘れないで対応していくので、今日の聖書に書かれているようなこういう方向に行くようになるわけです。これがクリスチャンの人間関係というものになります。

2. 信者には、いのちを持つ人の余裕が現れる。

それからもう一つ。信者にはキリストによっていのちが与えられるので、そのいのちを持っていのちを分け与える人としての余裕が現れるようになります。

それで今日の聖書に言われているような姿勢が持てるようになるし、またそのような人間関係が可能になるわけです。

1) 私に臨まれた真理-ただの知識と理解ではない 敵である私を…

まず先ほど申し上げました真理というのは、ただ知識として理解しているものではありません。ただの知識ではありません。その真理が実は私に臨まれたものではないでしょうか。私とその証人ではないでしょうか。私が自分の罪過と罪との中であって、たましいが死んでいた者であって、神の御怒りを受けるしかない者として生まれて、実際に神に敵対して神様を信じる信仰から遠ざかって、悪魔サタンが喜ばれることばかりやっていて、神様に敵対して神様の方から見たときには敵と同じような者なのに、私にこの救いの真理が臨まれることになりました。私はその証人なのです。つまり、神様は神の願い、この救い一つのためにすべてを超越して私に臨まれました。それをいちばん体現しているものがクリスチャンの私、自分ではないでしょうか。そこから人間関係がスタートするわけです。そのように神の救いの真理がすべてを超越して、私が何をどうしたのか、敵だったのかどうか、神様に石を投げたのかどうか、神様に悪口を言ったのかどうかなど全部超越して、神は私が救われること一つだけを願い、その願いを私に成就させました。それで今、私はイエス・キリストを信じて神の恵みによって救われて神の子どもになり、いま失われていたそのいのちを取り戻して私の内側にいのちを持つことになりました。

2) I ヨハネ 5:12、使徒 3:6

I ヨハネ 5:12 には、御子を持っている者にいのちがあり、御子を持たない者にはいのちがないとされています。イエス・キリストを受け入れた私にはいのちがあります。それで使徒 3:6 には、ペテロが美しの門の前で施しを求めている生まれながら足のきかない人に向かってこのように言っています。金銀は私にはない。私にあるものをあなたにあげようと。人々に絶対必要ないのち、キリストがいま私の内側にあり、そのいのちを持っている幸いな者になっています。なので、今日の聖書を見ていても、そういう意味で特に 31 節、自分にしてもらいたいと望むとおりに人にもそのようにしなさい。してもらうことなく、人にしてあげる立場の人間だということを今言っているし、34 節にも返してもらうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるのでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらうつもりで、罪人たちに貸していますと。38 節を見ても、与えなさい。そうすれば自分も与えられます。クリスチャンというのは、神様の恵みによりすべてを超越して、世の中の理屈では到底説明不可能な神様の恵みによりキリストによる救いがその人に届いた者なのです。それでその人はキリスト、いのちを持つことになりました。そして今現在、世の中の人々、たとえ私に害を加える者、敵と思われる人間、私を呪う人間がいても、その人間に必要なのはこのいのち、救いなのです。そして神の願いは彼らが救われること以外に何もありません。願いはただ一つだけなのです。だから彼らに絶対必要なのは神の無条件の救いであり、いのちであり、キリストなのです。そして、そのキリストがいま私の内側にあるのです。

3) ルカ 6:31, 34, 38-あげる立場に

だからいのちを持っているクリスチャンというのはあげる立場に立っている存在なのです。あげる立場、これを忘れてはいけません。クリスチャンがこれから人間関係を営んでいく中でいちばん大切なポイントが、私は肉体的な面、また社会的な立場がどうであれ、霊的にあげる立場に立たされる者です。金銀は私にはない。私にあるものをあなたにあげようと、その差し上げる立場の人間なのです。向こうの人が私に優しくしてくれる人であれ、敵であれ、どっちであれ、私の内側にあるいのち、キリストが必要な人間なのです。その見方以外に、私たちには他に見方などありません。彼らにないいのちが私にあるので、私はそれを差し上げる立場に召されて立たされている者だということが分かったときに、そこから生まれる余裕というものが人間関係に力として現れるようになります。だからいのちをあげる立場の人間なので、その相手と競争に走ったり、相手の何かを奪い取ったり、自分の欲を満たしたりというようなことは話にならないです。噛み合わないわけです。そういう意味で今日の聖書がこのように書かれているわけです。

4) 溺れて死んでいく人に必要な一つ

例えば、川に溺れて死んでいく人に必要なのは命綱です。私が命綱を持ってるときに。川に溺れて死んでいく人に何をどうするのでしょうか。その人に必要なのはたった一つなのです。命綱です。それを私が持っています。なのにその命綱を彼に渡すこと以外に、「あなたはなぜそこまで落ちて溺れたのか。だから気をつけなさいって言ったでしょう」とか他にいろんなことが言えるのでしょうか。私のまわりの人々が川に溺れて死んでいくと見えないから競争しようとしたり、また喧嘩したり争ったりになるかもしれませ

ん。しかし、本当に溺れて死んでいく人が間違いなければ、理由がともあれどうであれ、命綱を渡すこと以外は何もしない。そうでしょう。日本は災害が多い国です。災害の現場にボランティアとしてその災害の現場を助けるつもりで、あげる立場の人として入ったボランティアが、その災害に見舞われている人と競争するのでしょうか。彼らの何かを奪おうとするのでしょうか。それは詐欺師でしょう。また、そこにいて自分の欲を自分の利益をどうにかしようとして何かをするのでしょうか。それはもうボランティアではありません。ボランティアは災害に見舞われている人々にこちらが必要な物を上げるために行く立場なので、そういうことをよく考えてみればクリスチャンの人間関係がどんなものなのかということが理解できるようになります。

5) いのちを持つ人の处世

つまり、クリスチャンは、人々に絶対また唯一必要ないのちを持っている者、それを分け与える者なので、それが处世術になるわけです。それで今日の聖書の箇所は、あなたの敵を愛しなさい。あなたを呪う者のために祝福しなさい。人のものを奪ってはいけません。あげなさいよ。打たれたらもう一側も差し出ささいと言われてることは器が大きいからという次元の話ではなくて、彼らが知らない真理が何か分かっていて、彼らに必要ないのちが私の内側にあって、それを分け与える立場に立っている者なので、他のなにかでその祝福を邪魔されない。神の一つの願い、またその相手、人間に絶対必要なその必要、それを何かのことで忘れてはいけないという意味で言われていることなのです。そういう意味でクリスチャンの人間関係というものは、世の中で言われている人間関係に対するさまざまな教えや方針とは次元が全く違うものだということを覚えて、なぜ聖書には私たちの頭では理解できない、ある意味で復讐したい、放っておくわけにいかないと思うしかない相手にでも許しなさい。祝福しなさい。その人のために祈りなさい。愛しなさいと言われているのか、そのことをよくよく考えてみていただきたいと思います。

もう一度改めて申し上げます。道徳的な器の云々という話ではありません。聖書は道徳を語っているものではないし、道徳のレベルでは全く理解できない話ばかりなのです。霊的な話なのです。これはクリスチャンの自負でもあるし、自尊心でもあるし、クリスチャンだけに許されている余裕なのです。相手が私に唾を吐いたとしても、彼のために祈るその余裕がその力がクリスチャンには与えられています。なぜそれが可能なのでしょう。真理が何か分かっているから。神の願いは一つしかありません。その人間に必要なものも一つしかありません。そして、それを私が持っているのです。それをあげる立場、分け与える立場に立っている者なのです。そういうことを絶対に忘れることがないように。さまざまな人間関係に悩んでいるかもしれません。しかし、その人間関係は悩みの種ではなくて、このような素晴らしい余裕を味わうためにその力を発揮するために許されている現場であるということを改めて整理して、これから残りの生涯、いきなりできないかもしれませんが、人間関係のゆえに倒れることがないように。人間関係に全く次元の違う勝利者としてしっかり立つように祝福を祈りたいと思います。

改めて人々に絶対必要なこと、そしてその答え、いのちがクリスチャンの自分の中にあることに驚いて、また感謝しましょう。それで異次元の处世術、それこそ聖なるものというもののなのです。世の中の人とは全く違うので、それが聖です。その異次元の处世の主人公としての自覚を持ちましょう。となると、譲るようになり、受け入れることになり、超越して挑戦する姿勢を保つことになります。ここでの挑戦というのは、人を生かすということなのです。そして、これから自分の残りの生涯のメインジョブは、いのちの無いままに自分の中にあるいのちを分け合うことなんだと。これに釘を刺して、それを中心にしてすべてを整理しましょう。自分の人生の過去、現在、未来をこのメインジョブを中心にして整理して編集してみましょう。今自分が置かれている、置かれているその現場を今まで見ていたとおりではなくて、このメインジョブ、いのちの無いままに自分の中にあるいのちを分け合うメインジョブを中心にして現場を整理してみましょう。また、自分の業、学業、職業、事業などもこれを中心にして整理して、家庭もそのように整理してみましょう。それで残りの生涯、本当に譲る人、へりくだっていく人、そして待つことができる忍耐するそのような信者として残りの生涯を勝利していただきましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。私たちは世にいる間に神様はさまざまな人との関係を許していらっしゃることを覚えて感謝申し上げます。今までは世の方針にしたがって人間関係を保とうとしているから疲れて重荷を負うことになりました。それで人間関係が重荷になってしまいましたが、しかし、クリスチャンにはどのような人間関係であれ、それが真の真理が分かって、いのちを分け与える立場に立っている人としての余裕を味わうための神様が許された最高の機会があることを改めて覚えて、人間関係に対応していくことができるように。それで神の一つの願い、人が救われることに私たちの内側にあるいのちを持って用いられるように残りの生涯を祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。